

1 国語

*** 開始の合図があるまで、開いてはいけません ***

試験が始まるまで、下の〔注意事項〕を読んでおいてください。

〔注意事項〕

- 問題用紙は表紙をふくめて8枚、解答用紙が1枚あります。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 国語の試験時間は、50分です。
- 印刷の見えにくい場合のほかは、質問を受けません。
- ホッチキスは、はずしてもかまいません。
- 必要なものは、えんぴつ、消しゴムです。

※問いに字数制限がある場合は、句読点等をふくみます。

□ 次の問いに答えなさい。

問一 線部①～④について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。
(ただし、送りがなが必要な場合は送りがなまで書くこと)

- ① イイワケは無用だ。 ② ジュクレンの技。 ③ サカンな拍手。 ④ 机上の空論。

問二 次の三つの()に共通して入る語を漢字一字で答えなさい。

- () が立つ () がうまい
① () がきく ② () に合う
() が広い () をはさむ

問三 次の文の誤りを例にならって直しなさい。

誤

例 私がそちらに行かれます。 (行かれます) ↓ (参ります)

正

- ① 私がおっしゃった言葉が記事になっている。 ② 先生が私たちの作品を拝見しました。

問四 次の文の主語を答えなさい。

- ① 彼の家には犬がいる。 ② 今日こそ昨日よりも良い天気になるはずだ。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、文章等の一部変えています。)

そもそも、「方言」とは何でしょうか。ここまで「方言」とは何かということについて、とくに説明なしに「地域のことば」という意味で使ってきました。言語学で「方言」というときには、話し手がどのような*1属性をもつ人であるのかに基づく言語変種であるために、本来は二つの意味をもっています。

一つは、地域によることばの違いを示す「地域方言」。もう一つは地域以外の話し手の属性と結びついたことばのバリエーションを意味する「社会方言」です。たとえば、性、年齢、職業や役割などに基づく「男ことば／女ことば」「若者ことば／おじさん・おばさんことば／老人語」「ギョーカイことば」「接客ことば」などなどです。

日本語社会では、これらのうち、地域差が意識されやすく、同時に地域方言についての知識がわりあい広く共有されているという特色があります。そのため、「方言」といえば「(1) 方言」を指すことが多いようです。

(中略)

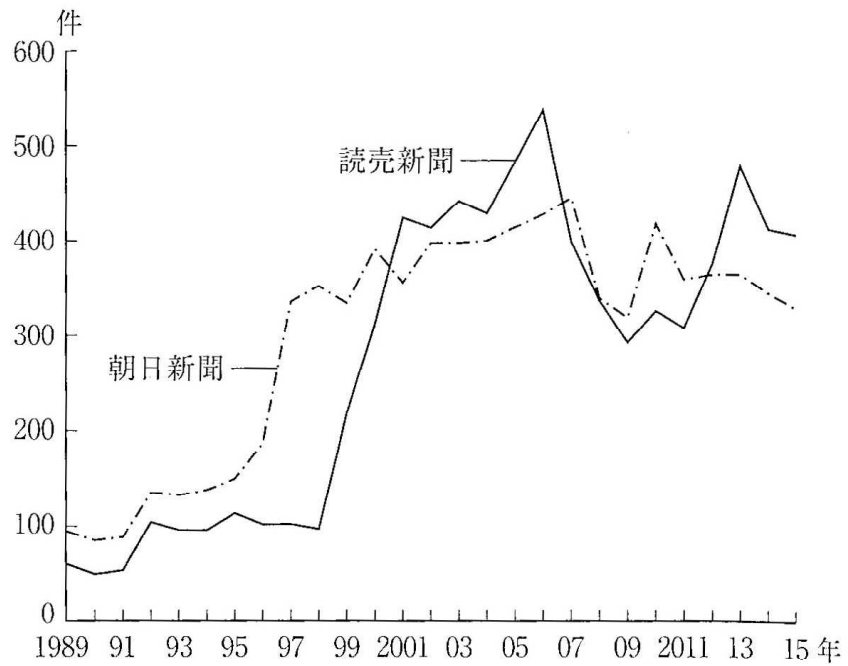
インターネット元年と呼ばれたのが一九九五年、総務省調べのデータによればインターネット世帯別普及率が五〇%を超えたのが二〇〇一年、その翌年には八〇%、〇七年には九〇%を超え、ほぼすべての世帯がネット接続可能な環境となり、こんにちに至っています。新聞紙上に登場する「方言」をキーワードとする記事類の件数の増加を、世間における関心の高まりと見ますと、「方言」記事類の件数急上昇【図1】がちょうどインターネット世帯別普及率が五〇%を超えたあたりであることは、偶然ではありません。

インターネットが一般化するに伴い、わたしたちのコミュニケーションのあり方は劇的に変化しました。ネット普及前は、*2メディアは様々なながらも「話しことば」か「書きことば」という二つの選択肢しかありませんでしたが、ネット普及に伴いキーボードなどを介した「打ちことば」という選択肢を新たにもつようになりました。

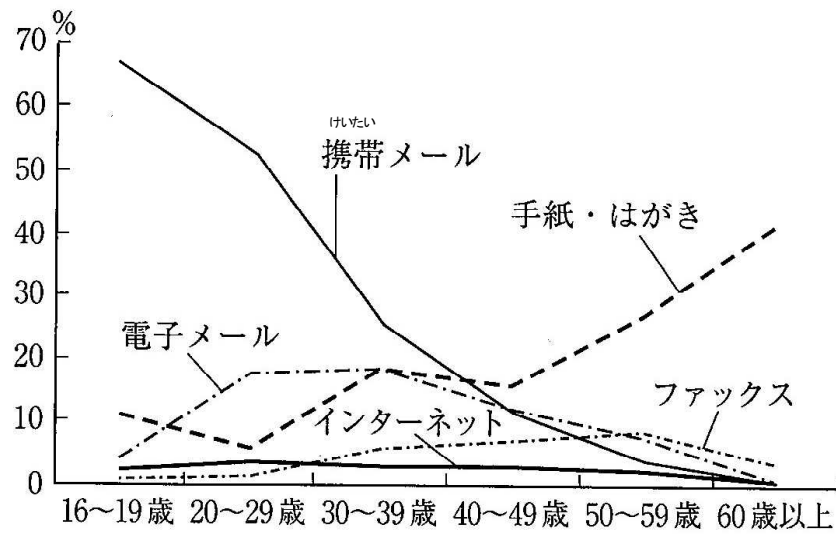
もちろん、*3ワードプロセッサやパソコンなどを用い、キーボードを介した「打たれたことば」は、それらが普及した八〇年代以降徐々に日常生活にも広まりつつありましたが、それによる日常的コミュニケーションの一般化とは異なる状況でした(それでもワープロが普及することによって、人々の書記行動や文体が変わるということは当時も十分に意識されており、初のワープロ小説という触れ込みの純文学作品も登場してはいました。ちなみにそれは一九八四年に新潮社より刊行された安部公房の『方船さくら丸』です)。

インターネットの普及によって、その「打たれたことば」が、日常的なコミュニケーションのツールとなっはじめて、「話しことば」「書きことば」に新しい「打ちことば」という*4チャンネルが追加されることになるわけです。

さて、みなさんは、身近な親しい人に連絡をする場合、とりあえず何を使うでしょうか。若い方ならばスマホでSNS、中年以上の方ならばスマホを含む携帯・PC経由のメールや通話、高年齢の方ならばスマホを含む携帯または固定電話による通話、あるいは手紙・はがき類、直接会って話をする、でしょうか。



【図1】平成期「方言」を含む記事件数の推移



【図2】「話しことば」以外のコミュニケーション手段について

インターネット世帯別普及率が8割を超えたところに文化庁が実施した平成一三(二〇〇一)年度「国語に関する世論調査」における、日常的な人々の「話しことば」以外のコミュニケーション手段について尋ねた結果【図2】を見ても、すでに世代差は明瞭です。調査当時の四〇歳台を境に若い世代は「(a)」、すなわち「打ちことば」が第一選択肢となつていますが、四〇歳台以上では「(b)」と「書きことば」が第一選択肢となつています。

「打ちことば」は、基本的に互いの顔が見えない状態で行われる非対面かつコミュニケーションに*5タイムラグを伴う非同期的なものです。キーボード等を介するといえ「文字」によるコミュニケーションである点は、「書きことば」的です。

一方で、従来の手紙に代表されるような「書きことば」コミュニケーションに比べると、文章は短く、*6インターネットははるかに短く、そこで用いられることばは極めて「話しことば」的なだけなものが選択されることが一般的です。PCメールが登場した初期は、かなり「手紙」的な文体を模したものでしたが、二〇〇〇年代に入り、インターネット経由の携帯メールが普及し、インターネットがさらに短くなると同時に、短文化、話しことば化が急速に進みます。むしろ、こんにちでもPCメールは、ビジネスで用いられることも多く、「手紙」的な文体特徴はかなり残っています。それでも九〇年代後半の文体に比べるとかなり「やわらかい」そして、短い文書になってきています。

「話しことば」には、イントネーションや声の調子や声色などによって様々なニュアンスを込めることができます。しかし、「文字」によるコミュニケーションである「打ちことば」では、表記をいくら工夫しても、ニュアンスを十分に伝えることは困難で、それをどうにかしたいという欲求から、(笑)(汗)のようなカッコ文字や(〜)(〜)のような顔文字、♡の様な絵文字といったキブンを司る表現として、各種の記号類が編み出されました。それが「打ちことば」の特徴の一つとなっています。

要するに、「話すように打ちたい！」が新しいルールを生み出す動機となつていくことが分かります。こうなると、従来の親しい間柄における「話しことば」の親密*7コード「方言」で「打ちたい」までの距離はほとんどありません。

それからもう一つ、八〇年代以降の日本語社会においては「方言」がすでに情的な価値を伴うトクベツなことばとなつていたことも重要です。かわいい記号などが駆使されたメールはいわば、あなたのためにトクベツに*8カスタマイズされたトクベツなメールです。新しい表現の一つとして「方言」を、そのカスタマイズのための*9リソースとする発想をもつには十分な*10素地が「打ちことば」が普及した時期にはすでに醸成されていたというわけです。

インターネットの普及に伴う「打ちことば」の広まりが、「方言」に対する人々の関心を引き寄せ、一層の「価値」を「方言」に与えることになった、これが、先ほどインターネットの普及と「方言」への関心の上昇は無関係ではないと言及した背景です。

そして、いよいよ本来「打ち手」の地元とは結びつかないヴァーチャル方言が盛んに用いられる時代の到来、となるわけです。これが今、わたしたちが見ている世界です。

「方言萌え!? ヴァーチャル方言を読み解く」(田中 ゆかり)より

〈注〉

- *1 属性：根本的性質。
- *2 メディア：新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどの通信媒体。
- *3 ワードプロセッサ：文書の作成のため入力・表示・編集・記憶・印字などの機能を備えるコンピュータ機器。
- *4 チャンネル：経路。道筋。
- *5 タイムラグ：時間のずれ。
- *6 インターバル：間隔。合間。
- *7 コード：情報を表現するための記号や符号の体系。
- *8 カスタマイズ：改良。改造。
- *9 リソース：資源。
- *10 素地：何かをするときの基礎。土台。

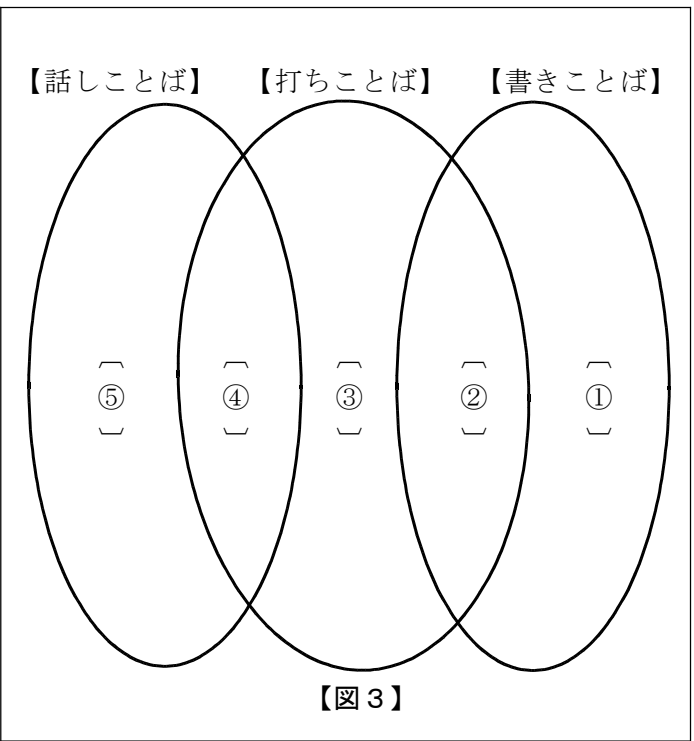
問一 (1) に入る言葉として最も適切なものを本文中から探し、ぬき出して答えなさい。

問二 — 線部「インターネットが一般化するに伴い、わたしたちのコミュニケーションのあり方は劇的に変化しました」とありますが、それはどういうことですか。「八〇年代」「打たれたことば」「打ちことば」という語句を使って、八十字以上、百字以内で説明しなさい。

問三 (a) (b) に入れるのに最も適切なことばを、それぞれ【図2】の中から探し、ぬき出して答えなさい。

問四 次の【図3】は「書きことば」「話しことば」「打ちことば」についての筆者の考えを整理したものです。

(1) 【図3】の中の「①」～「⑤」に入る適切な説明を、次のア～オを使ってそれぞれ答えなさい。



ア インターネットや声の調子などで様々なニュアンスを表現できる。

イ 文字によるコミュニケーション。

ウ 使われる言葉はくだけたものになりがち。

エ カッコ文字や顔文字などの各種の記号類を使う。

オ 文章が長くなりがち、返事が戻るまでのインターバルは長い。

(2) 「打ちことば」が「書きことば」や「話しことば」とはちがう言葉に変化してきたのは、どういう気持ちからですか。本文の言葉を使って、十五字以上、二十字以内で答えなさい。

問五 本文の内容として正しくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々が「打ちことば」として「方言」を使いたいと思うようになったのは、それが元々「話しことば」の中でも特別に仲のよい間柄で用いられるものだったからだ。

イ 「打ちことば」を多くの人たちが使うようになったことが「方言」への関心を高め、それまで以上の価値が「方言」に加えられることとなった。

ウ 親密な相手に特別な表現でメールを作りたいという心理に、八〇年代に地域に根ざした表現として生まれた「方言」はちょうど便利な表現であった。

エ 日本では「打ちことば」を使う人の出身地とは関係がないヴァーチャル方言が、新しい表現の一つとして方々で使われるようになった。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学三年生の「みさと」は、昨年まで所属していたバスケットボール部を辞め、放送部に入部した。はじめは部長の「古場」と二人だけの部活動だったが、クラスメイトの「葉月」や「新納」、下級生の「珠子」が入部し、にぎやかになっていく。次の場面は、放送部員が初めて大会（コンクール）に出場することを決め、準備を始めたシーンである。

月曜日は朝から霧のような雨が降りつづいていた。窓の外はぼうつと灰色に煙っている。

「蒸し暑い。つまんなーい。外で思いきり発声やりたーい」

腹筋を終えた珠子が床の上でじたばたと駄々をこねている。廊下や体育館は残らず運動部に占拠され、みさとたち放送部員は狭い放送室に押しこめられていた。

みさととは原稿用紙に向かい、もうずっとニュース原稿の下書きに頭を悩ませている。古場は無心にCDデッキを磨き、新納はテーブルで数学のプリントを広げている。葉月は放送卓の前に座り、図書委員の忘れていった文庫本を開いていた。色のあせた古い本だった。

「おもしろい、それ？」

みさとが声をかけると、葉月はさあ、と肩をすくめた。

「……でも、冒頭の引用文はちよっとおもしろいかも」

ばらばらとページをめくり、その部分を声に出して読みあげた。

「――①両手の鳴る音は知る。片手の鳴る音はいかに？」

みんながきよんとするなか古場ひとりがうなずいた。

「*1サリンジャーだよ。*2禅の公案だよ」

葉月を除く一同が尊敬のまなざしを向けると、古場は顔を赤くした。

「紹介文を書くために調べたんだよ。『*3隻手の声』、だったかな。――(1)、両手を打ち合わせると音がするけど、

片手だったらどんな音かって」

「片手？」

珠子が首をかしげながら、すかつすかつと右手で宙を切るようなまねをする。そのとき戸口に*4須貝先生が顔を出した。

「やあみんな、お疲れさーん」

あいかわらず緊張感のかけらもない。須貝先生はおかしな動作をくりかえす珠子に目を留めた。

「なにそれ。新しい筋トレ？」

さっきの一文について説明すると、須貝先生はきよんとした表情で聞いていたが、すぐにぱつと顔を輝かせた。

「なあんだ、そんなの簡単だよ」

そばにいた新納に声をかける。

「ちよっと手出して」

新納が手のひらをさしだすと、須貝先生はそれに自分の手を打ちつけた。

ばん、と音が鳴った。先生は得意そうにみんなの顔を見て、

「ねっ？」

と言った。

みさとたちがぼかんとしているのに気づくと、須貝先生はあわててまじめな顔を作ってみせた。

「えーっと、どっちかっていうと②悪いニュースがあるんだけど――」

翌朝、みさとたち放送部員はいつもより早めに登校して校門脇に集合した。雨は昨夜のうちに上がり、曇り空からときおり光が射して、暑くなりそうな予感がした。

ほかの先生たちと一緒に、ずらりと整列する。始めは教師だけで行われていた朝の挨拶運動に、生徒たちも参加することになった。まずは生徒会役員が表に立つことになったが、その後の職員会議で部活動ごとに当番制にしてはという提案がなされたらしい。(2)、放送部はほかの部に比べて明らかにその出番が多く組まれていた。ほかの部は週に一回程度なのに、放送部は二回もある。みながげんなりした顔をするのに、

「放送部には、朝練になつてちよっどいいだろうって……」

と、須貝先生は面目なさそうに報告していたが、だれの差し金によるかは聞かなくても推測できた。その場にむうつと重い空気がたちこめそうになったとき、葉月がゆっくりと椅子を回してふり向いた。

「――やっつてやろうじゃない、朝の発声練習」

低い声で告げる横から、珠子が、葉月先輩*5ここ、ケータイのアンテナみたいですね、とその眉間を指さして言った。

「――ア、ア、ア、ア、ア、ア」

「ア……」

いきなり発声練習を始めたみさとたちを見て先生たちが驚いたような顔をする。急に大きな声を出すのどを痛めるんですよ、と須貝先生が説明していた。今日は放送部のほかにサッカー部も参加している。一年生ばかりらしく、*6ちらちらと

葉月を盗み見ている。

校門の向こうに、生徒達がぞろぞろと坂を上ってくるのが見えた。見えない糸に引き寄せられるように、校舎へ向かってくる。

最初の生徒たちが校門をくぐってきた。③ 葉月が合図するようにうなずき、みさとたちは思いきり深く息を吸った。

「みんな、今日はすごかったねえ。ぼくなんか、負けずに声だそうとしてどかれちゃったよ。ほら、こんな」
昼休みに再び集まったとき、須貝先生はかさかさになった声で笑ってみせた。

「放送部がんばってますねって、ほかの先生にもほめられて、ぼくも鼻が高かったよ」

みさとたち放送部員の声量は他を圧倒し、一気にその存在感が高まったらしい。春からの特訓の成果だった。

「へへん、サッカー部の一年坊主なんか目じゃないですよ」

珠子が小さな体でそっくりかえってみせた。

そのうえあるうことか、今朝は古権沢先生にまで「立派な挨拶だった」とほめられた。

「ばっかじゃない」

葉月はふんと鼻で笑った。

「あんなの、ただ大声で他人の声たたき潰してただけじゃない。挨拶でもなんでもない。朝練だって言うから、そうさせてもらっただけよ」

そう言う葉月は、あの場でだれよりも注目を集めていたのだが、控えめにかけられる声をすべて無視してひたすら空をならんで声を出しつづけていた。葉月先輩って怒ると怖いんですね、と珠子がいまさらなことを言った。

⑤——それだ

急に新納がつぶやいた。

「使えるんじゃないか？ それ」

古場も目を輝かせて新納の顔を見ていた。深くうなずく。

「うん。いけると思う」

「なにがですか？」

珠子の質問に、ぼくたちのラジオ番組だよ、と答えると、古場は再び新納に目をやった。

『隻手の声』——だよね？

新納はそれに答えるようににこりと笑った。

——〈隻手の声〉または〈隻手音声〉： 禅僧・白隠慧鶴による禅の公案。

『隻手声有り、その声を聞け』——

「ABC！ 曙第二中学校放送部」（市川 朔久子）より

〈注〉

- * 1 サリンジャー：アメリカの作家。有名な作品に『ライ麦畑でつかまえて』がある。
- * 2 禅の公案：禅宗で、修行中の僧に仏の教えの真髄をさとるために与えて考えさせる問題のこと。
- * 3 隻手：片手。「隻」は片方という意味。
- * 4 須貝先生：放送部の顧問を務めている、新任の先生。
- * 5 ケータイのアンテナ：携帯電話やスマートホンなど携帯情報端末機器の電波受信状況を表すアンテナマーク。
- * 6 ちらちらとく：葉月は人目を引くほど美しい顔立ちをしている。
- * 7 古権沢先生：みさとや葉月の担任であり、生活指導に厳しい先生。異性からの注目を集める葉月を、トラブルメーカーと見なし、特に厳しく指導をしたことがある。



問一 (1) (2) に入れるのに最も適切なものを次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア それとも イ つまり ウ だから エ しかも オ では

問二 — 線部①「両手の鳴る音は知る。片手の鳴る音はいかに？」を聞いた「珠子」と「須貝先生」はそれぞれ違う動きをしてみせました。二人はそれぞれ「片手の鳴る音」をどのようなものとらえましたか。(A) (B) に入る適切な言葉をそれぞれ答えなさい。

珠子	()	で鳴らす音
須貝先生	()	で鳴らす音

問三 ― 線部②「悪いニュース」とありますが、「須貝先生」が伝えたニュースの内容を、本文の言葉を使って三十字以上、四十字以内で説明しなさい。

問四 ― 線部③「葉月が合図するようにならずき、みさとたちは思い切り深く息を吸った」とありますが、この後に「みさと」たちは一般的に行われる「朝の挨拶運動」とは異なる行動をとりました。次は、その内容を表にまとめたものです。

	一般的な朝の挨拶運動	― 線部③のあとの行動
目的	挨拶を交わして一日をさわやかに始めるため。	(C)
行動	相手に明るい挨拶を届ける。 相手からの挨拶を受け取る。	(D)

(1) (C) に入る最も適切な言葉を、本文中から六字でぬき出して答えなさい。

(2) (D) に入れるのに適当な内容を、「相手」という言葉から書き始め、十字以上、二十字以内で答えなさい。

問五 ― 線部④「鼻で笑った」とありますが、「葉月」がそのような態度をとったのはなぜですか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 今朝の行動が古権沢先生にまでほめられると思っておらず、照れているから。
- イ 古権沢先生からのほめことばが的外れであると思い、見下しているから。
- ウ 古権沢先生に話題にされることが不快で、作り笑いで気を紛らわしているから。
- エ 古権沢先生も誰かをほめることがあることに驚き、ほほえましくなったから。

問六 ― 線部⑤「―それだ」とありますが、このとき「新納」が得たひらめきを次のように説明します。

新納は、今朝の挨拶運動についての会話を聞いて、昨日の放送室での出来事を思い浮かべた。
思い浮かべたのは (E) という行動である。それは、両者のやりとりがあつてはじめて成立したものであった。
新納の中で「 F 」と「挨拶」が結びついた。新納は大会に出品するためのラジオ番組のアイデアがひらめいた。

(1) (E) に入れるのに最も適切な内容を本文中から一文で探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

(2) (F) に入る最も適切な言葉を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 隻手の声
- イ 禪の公案
- ウ 発声練習
- エ 須貝先生

(3) 「新納」と「古場」たちは、これからのどのようなラジオ番組を作ることが想像されますか。二人の考えに最も近いと思われるものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 教師と生徒による朝の挨拶運動の意義についてインタビューやアンケート調査を行い、挨拶の効果を検証する番組。
- イ 挨拶は確実に相手に届けることが重要だと考え、大きくはっきりした声を出すためのトレーニング法を紹介する番組。
- ウ この挨拶運動のように、複数の人の協力によって多くの人に気持ちを届けられる活動を新たに作り出そうとする番組。
- エ どんな場でも誰に対しても感じよく受け取ってもらえる理想の挨拶を、禪の精神を追求することで見出していく番組。
- オ 強制されるものでも儀礼的なものでもなく、たがいに気持ちを伝え合える挨拶の形を考え、その実行をすすめる番組。

問七 この文章には、起こったことが時間の経過通りに記述されていない部分があります。本文中からその部分の最後の五字をぬき出して答えなさい。

